

# 福田雅之助

## 生誕120年記念

# 第1回全日本庭球選手権大会優勝 「この一球は無二の一球なり・・・」



撮影：横山芳治

1922年9月東京帝大御殿山下テニスコートに連日テニスファンが詰め掛けたその人波の中、外国製バッグを下げとくとして通う福田雅之助がいた。東京府豊多摩郡戸塚村（現在の新宿区西早稲田）に1897年（明治30年）に生まれ、幼いころは隣に早稲田大学の野球場があったことから野球少年だった。軟式ラケットで遊ぶこともあったが本格的にはじめたのは早稲田中学に入学してからだった。次第に頭角を現し早稲田大学のコートへ練習に行くこともあった。大学には顔なじみの選手もいて打ってもらうなどするうち腕はあがっていった。そのころはまだ早稲田はレギュレーションボール（硬球）を採用していなかった。早くにこれを採用していた慶応庭球部に遅れ1920年（大正9年）熊谷、柏尾、清水の海外での活躍に刺激されて高商、高師、早大が硬球を採用していった。硬球時代の始まりだ。それより前、福田は卒業して早大コートや所属するポプラクラブのコートで現役やOBたちと練習を重ねた。そして各地のトーナメントにも出場、優勝もし自信も強めた。

1921年（大正10年）朝吹常吉氏により日本庭球協会が設立された。熊谷、清水がデ杯戦で豪州を破り米国にチャレンジした記念すべき年である。そして日本庭球協会主催第1回全日本庭球選手権大会が、開催された。優勝候補筆頭の前田[慶応大]はベストエイトで福田に6-2 7-5 2-6 4-6 1-6で敗れた。難敵を倒した福田は後輩川妻も一蹴、決勝へ。太田[高師]と鳥羽[神商]はフルセットの大接戦で太田が勝つ。決勝は福田の日ごろ鍛えた、正確なストロークとボレーが太田を圧倒、6-2 7-5 7-5のストレートでニューヨークカップを獲得した。25歳だった。

このカップは1921年熊谷、清水のチャレンジラウンド出場を記念して、ニューヨーク在留邦人が1000ドルを集めて造った大銀杯で全日本単試合に寄贈した。20回大会後、空襲により焼失したものを、日本テニス協会がミュージアム基金から復刻再現し、90回大会優勝者内山靖崇に天皇杯と共に授与された。福田はその後



第1回全日本庭球選手権優勝 NYカップを受く

提供：福田達郎

第6回大会で安倍[稲門]と組み、ダブルスで優勝。1923年（大正12年）福田は早稲田初のデ杯選手として渡米した。そしてイースタングリップの創始者とも言うべきチルデンとの運命的な出会いがあった。渡米して最初の一流プレーヤーが彼だった。そして彼の科学的で立派なことに心酔してついに自分のテニスを根本から変えて、いわゆるイースタングリップにしたのだった。

それほど彼の感化は福田にとって大きなものだった。それから福田はイースタンを体得すべく努力したがかつての強いストロークは戻らずデ杯戦の試合から外れたこともあり、後に批判されたこともあったが、外国人はみなラケットの両面でバックもフォアも打つ未知の世界のテニスだった。



清水善造とビル・チルデン

（ミュージアム収蔵写真）



十去は式婚結のんさ于美富村田と君助之雅田福士同形花の界球庭本日  
夫氏吉敬重針監先大の界球庭もれ是、で館會限大らか時一後午日五廿月  
保權手選手名てつ切界ッーホス大に互おろし何、がたれは行で酌媒の妻  
。るあでのもなうやたけかを輪に度出芽お度恰らかだのふいと者持

大正15年10月 雅之助・富美子 華燭の典

(田村富美子切り抜き帳より)



昭和49年5月 喜寿の祝い 最後のツーショット

提供：福田家

そしてこれが理想的であり合理的だと痛感した。この知られざる合理的なテニスを日本に紹介するのは自分の使命だと信じた。

米国での3年あまり、田村富美子と手紙のやり取りをしていた。田村は陸上の選手で第一回全日本陸上選手権50メートル100メートルの優勝者であり、テニスでもお茶の水高女の田村梶川組は関東で敵なしだった。女子練習会にコーチとして参加した福田は田村に心を惹かれていった。病院の跡取り娘との結婚はすんなりとはいかなかったが、二人の熱意が理解され1926年（大正15年）10月華燭の典をあげた。結婚後富美子はラケットを握ることはなかった。福田は東日新聞運動部記者として観戦記事や署名記事を書くと共にテニス関連の書籍を著した。そしてテニスに対する考えや想いを書き止めていたものを一文にまとめたものが「この一球」だ。

晩年、テニスの試合がないときには家で読書か書を書き、妻富美子が染めるろうけつ染めなども楽しみ、のれんやバックに仕立て知人に差し上げていた。1974年（昭和49年）五月、雅之助の喜寿の祝いを家族全員で祝った。この年前年より取り組んでいた「早稲田大学庭球部七十周年誌」を完成させ、秋には力を入れていた毎日トーナメントも終わり、年賀状も書き終えていた十二月二十一日心臓喘息が福田を襲い最愛の妻富美子らに看取られての急逝だった。文字どおりテニスにささげた一生だった。後日、永年監督を務めてきた早大庭球部三神記念コート6面の1面に祭壇を設け、早稲田のみならず多くのテニス関係者が参列して告别式が行われた。愚直なまでに自分の進む道を信じて逝った福田雅之助。120年を経て今思うことは……。

文：福田 達郎

**受賞歴** ヘルムス財団ヘルムス賞（米国）（昭和40年）  
勲四等瑞宝章（昭和43年）

**参考** 「日本テニスの源流 福田雅之助物語」岡田邦子著 毎日新聞社刊  
「早稲田大学庭球部七十周年誌」

注：ヘルムス賞とは、かつて米国のヘルムス財団が優秀なアマ選手を世界6大陸から毎年一人ずつ表彰していた。戦前に日本選手を18人選ぶが表彰プレートを渡せずに保管。65年に財団を訪れた毎日新聞記者に託した。（毎日新聞 2017.10.25「憂楽帳」より）